校長室だより～燦燦～ №６５

旅立ちの日に

2020.2.20

先日、本校の３年生が校長室であれこれと話している中で、「卒業式で『旅立ちの日に』を歌いたい」となった。ということは、梁川高校の卒業式では『旅立ちの日に』が歌われることはないということである。

３年生に聞いてみた。「『旅立ちの日に』がどうやってできたか知ってる？」生徒は知らなかった。もしかしたら教員でも知らない方が多いのではなかろうか。今や卒業式の定番ソングとなった歌である。この紙面を借りて「『旅立ちの日に』誕生秘話」を紹介したい。

この歌は１９９１年につくられた。

埼玉県秩父市立影森中学校の校長であった小嶋登先生は、当時荒れていた学校を立て直すため「歌声の響く学校」にすることを目指すことにした。私の感覚からいったら、荒れた学校を歌で立て直すなど到底考えられないことである。荒れた学校で一番大変な授業が、若い女性教員による音楽の授業である。校長の考えを知らされた当時の音楽科教諭であった坂本浩美先生は、どのような思いだったのだろうか。当時、坂本先生は２０代後半の若い教員であった。目の前が真っ暗になったのではないかと思う。

小嶋校長の考えのもと、合唱の機会が増えていく。最初こそ生徒は抵抗を示すが、坂本先生を中心に粘り強く努力を続けた結果、歌う楽しさによって学校は明るくなっていく。「歌声の響く学校」を目指して３年目の１９９１年２月下旬、坂本先生は「歌声の響く学校」の集大成として、卒業する生徒たちのために、何か記念になる、世界にひとつしかないものを残したいとの思いから、作詞を小嶋校長に依頼する。そのときは、「私にはそんなセンスはないから」と断られるが、翌日、坂本先生の机には書き上げられた詞が置いてあった。その詞を見た坂本先生は、なんて素敵な言葉が散りばめられているんだと感激する。その後、授業の空き時間に早速ひとり音楽室にこもり楽曲制作に取り組むと、旋律が湧き出るように思い浮かび、１５分程度であの名曲ができ上がった。

でき上がった曲は最初はたった一度きり「３年生を送る会」で教職員から卒業生に向けて歌うためのサプライズのはずであった。ところが、その翌年からは生徒たちが歌うようになる。小嶋校長は、この年に定年を迎えて退職した。それ以後、しばらくは影森中学校だけで歌われていた合唱曲だったが、次第にまわりの小中学校でも歌われるようになる。そして、１９９８年頃までに全国の学校で歌われるようになった。今では、「仰げば尊し」「巣立ちの歌」「贈る言葉」などに代わり全国で最も広く歌われる卒業式の歌となっている。

私がある中学校に勤務していたときに、以上のエピソードが「『旅立ちの日に』の誕生秘話」として、テレビで放送された。私は急いでそれを録画した。今でも、それを大事に持っている。私が『旅立ちの日に』と出会ったのは、その学校に勤務しているときだったと思う。初めて聞き、なぜだかわからないが涙が溢れてきた。ほどなくして「誕生秘話」を知り、なぜ涙が出てきてしまうのかがわかった。